

新・東中とんぼ通信

発行 横浜市立若葉台東中学校 編集責任 鈴木 徹



第2号

越冬する昆虫

前号で、屋外で越冬から目覚めた「ルリタテハ」を取り上げました。この他にも越冬する昆虫は、校舎内でも観察できます。3月中旬頃から、校舎内の階段あたりで数多くの**テントウムシ**がいたのにお気づきになったでしょうか。

彼らは集団で越冬するのですが、春を感じて個人行動を始めたようなのです。今後、出現数も増えてきますので、



ちょっと注意して観察してみてください。テントウムシは、よく知られるナナホシテントウを始めとして何種類も仲間がいますが、中には同じ種類なのに、背中模様には様々なパターンがある種もあります。ただただ、自然のデザイン力のすばらしさに驚くばかりです。

ナナホシテントウの大好きな食べ物は、**アリマキ**です。通称アブラムシとも呼ばれる昆虫です。彼らは植物の樹液を吸って生活しています。その行為が人間や植物にとって不都合になる場合があります。なぜなら、アリマキが樹液を吸うことにより、病原ウィルスを媒介してしまうからなのです。この辺り、動物と蚊の関係に似ていますね。特に、野菜や果物などの場合は、収穫が減るので、深刻な問題となるわけです。アリマキは人間にとっては迷惑な存在なので「害虫」、テントウムシは人間にとって有益な昆虫であるため「益虫」と呼ばれた時代

もありましたが、これは、人間の身勝手なランク付けだとは思いませんか。

こんな話もあります。アリマキの大発生を防ぐために農薬を散布したら、その後しばらくして、以前よりも大量のアリマキが発生したというのです。これは、農薬によりテントウムシも一緒に死んでしまったため、捕食者がいなくなったアリマキが素早く増殖し、我が世の春を謳歌したというわけなのです。現在では、改良型の農薬で、効き目が、ある種の昆虫や病原菌などに限られた、選択効果性のもも作られていますが、まだ研究の余地があるそうです。アリマキにとってテントウムシは「天敵」と呼ばれる存在です。このような関係を、農薬の代わりに利用したのが、「生物防除」・「生物農薬」といわれるものです。テントウムシを例にとると、植物に害を与えるカイガラムシという昆虫を食べる**ベダリヤテントウ**というテントウムシを使って、カイガラムシの駆除を行っている例があります。ベダリヤテントウは日本には生息しなかった種なので、カイガラムシの駆除のため、わざわざ外国から導入されたそうです。テントウムシ以外にも**ハチ**（寄生蜂）を利用した例などもあります。生物防除は効果の点で不十分だという意見もありますが、優れている点として、農薬のように残留し、生物の存在を脅かすような危険性が非常に低いことがあげられます。自然環境への影響を考えた場合、これは大きな利点ではないでしょうか。

